写真観賞におけるリアリティ再考

九州大学大学院人文科学研究院助教　江本 紫織

写真のリアリティは、写真の生成プロセスを論拠に説明されてきた。フィルム写真の光学的・化学的生成プロセスは写真と撮影された対象のつながりを保証するため、写真は撮影された過去の現実を写し出すと考えられてきたのである。このように写真の観賞によって得られるリアリティを技術的側面から論じるならば、デジタル化以降の写真はフィルム写真と同様に説明し得ないことになる。ところが実際は、生成プロセスの違いや加工・修正の有無にかかわらず同じ「写真」として扱うことができ、写真で見たことは一つの「現実」として認識されている。このことは写真のリアリティが、技術的観点以外から説明できることを意味していると言える。そこで本発表は、写真のリアリティを説明する新たな方法を模索し、写真観賞におけるリアリティの性質および構造について再定義することを目指す。

写真に写し出されたものが現実と見なされる構造を探るため、本発表は写真が伝達するものと観者がそれらをどのように受容するのかを区別する。まず、写真が伝達するのは視覚情報であると仮定し、視覚情報の処理の仕方が写真の見方を左右することを確認する。例えば被写体に関連する情報が得られれば、観者は写真の描写以上の情景を想起することができるはずである。このように豊かに想起される「現実」を本発表では「再構成された現実」と呼び、観賞時に意識される現実が撮影された過去の現実に限定されないことを示す。さらに、「現実」を再構成するのに必要な情報の性質を整理する。写真と関連づけ得る情報はキャプション、観者の記憶や知識等、視覚情報に限定されないだけでなく、撮影対象と直接関わりを持たないものもあると考えられる。

最後に、「再構成された現実」が一つの「現実」と見なされる要因を明らかにする。「再構成された現実」は情報の関連付け方によって変化するものであるため、撮影された現実と必ずしも一致せず、時に虚構的な要素を含み得る。そこで現在の写真の特性や観賞事例を検討し、写真と観者の属する物理的世界とのつながりや「再構成された現実」の変更可能性、あるいはその両方が「再構成された現実」を「現実」とみなすことにつながっていることを示す。

以上の検証により、写真の観賞において意識されるのは、撮影された現実に限定されないことを示す。もちろん「再構成された現実」は撮影された現実と一致することもあるが、再構成の仕方次第では虚構的な現実が一つの「現実」として受容されることもあり得るのである。このような性質を写真のリアリティとして再定義することは、メディアとしての写真の役割や可能性を再検討することにつながるだろう。